

○連載「知的感動ライブラリー」(68)『トゥーランドット』

プッチーニの歌劇『トゥーランドット』

総合科学部教授 石川榮作

1. 歌劇『トゥーランドット』の成立

イタリア・オペラ作曲家ジャコモ・プッチーニ(1858-1924)は『ラ・ボエーム』(1896年初演)に続いて『トスカ』(1900年初演)と『蝶々夫人』(1904年初演)といった今では世界的に有名な名作を生み出していったが、これらの名作の台本をルイージ・イッリカとともに担当してくれたジュゼッペ・ジャコーザを1906年に亡くしてしまい、スランプに陥っていた上に、さまざまな出来事が起こって、長い間、名作を創作することができない状態が続いた。このような状況下で『西部の娘』(1910年初演)や『三部作』(『外套』『修道女アンジェリカ』『ジャンニ・スキッキ』1918年初演)などの佳作を書き上げるものの、それらは自分を満足させるものではなかった。やっと自分を満足させる題材に出会ったのは、1920年のことである。『つばめ』(1917年初演)と『外套』(1918年初演)で台本を担当したジュゼッペ・アダーミとコンビを組むこととなったレナート・シモーニが、18世紀ヴェネツィアの劇作家カルロ・ゴッツィの寓話劇『トゥーランドット』を題材として提案したところ、プッチーニはそれに満足して承諾したのである。プッチーニはこの作品の題材を自分の実際の人生にあてはめたかたちで、新たに台本を作らせてから、夢中になって作曲に取り掛かった。ここにかつての名作と同じようなプッチーニらしいオペラ世界が展開されていったが、しかし、1924年11月に病没してしまい、第三幕のクライマックスとも言うべきところでそのまま絶筆となってしまった。そのあとはプッチーニの残したスケッチをもとにして弟子のフランコ・アルファーノ(1875-1954)が書き継いで、完成させた。1926年4月にミラノ・スカラ座で初演されたが、そのとき指揮したトスカニーニはプッチーニの絶筆の部分で演奏を止めたとも言われている。もちろん翌日の公演からはフランコ・アルファーノの補筆による最終場面まで演奏された。弟子によって見事に書き継がれて、素晴らしいフィナーレになっていると評してもよいであろう。以下、『トゥーランドット』のあらすじを順に辿りながら、この歌劇の見どころ・聴きどころなどを紹介することにしよう。

2. 歌劇『トゥーランドット』のあらすじと見どころ・聴きどころ

第一幕

緊張感漂う陰気な音楽が奏でられて幕が開くと、そこは皇帝アルトゥム治世の中国・北京の宮殿である。その前には大広場があって群衆であふれかえっている。そこへ役人が現れて、皇帝アルトゥムの娘トゥーランドットが行っている北京の掟について知らせる。それによると、トゥーランドット姫が花嫁となる相手の男性は王族の出身で、姫が出す3つの謎を解いた者に限り、その謎解きに挑戦した者で、それが解けない場合は首を切られるというのである。このたびペルシアの皇子がトゥーランドット姫との結婚を求めて謎解きに挑戦したが、3つの謎を解けなかったため、その皇子はやがて月が登る時刻に首を切られる予定であるという。

この酷い処刑のことを聞いて群衆は、怖れおののき、処刑を止めてくれるよう叫びながらざわめいているところに、盲目の老人ティムールが奴隷女リュウに伴われて現れる。彼はダッタンの元国王であり、戦いに敗れて、今は放浪の身で、奴隷リュウと旅を続けているのである。この北京の宮殿前の雑踏の中でティムールは転んで倒れてしまう。この老人を若い男が助け起こしたが、なんとその若い男はこの老人の息子カラフであった。親子はこれまで離れ離れになっていたが、ここで再会を果たして喜び合う。息子カラフは年老いた父ティムールにつき従っている奴隷リュウに向かって、「なぜこの老人と苦労をともにしているのか」と尋ねると、リュウは「以前にあなた様が私に微笑んでくれたことがあったから」と答える。奴隷リュウは皇子カラフに深い愛情を抱き続けていたことがこの場面から明らかとなる。

その場に首切り執行人プー・ティン・パオが現れて、砥石(といし)で首切り包丁を研ぐ準備が進められる。首切り執行人の手下たちは合唱で、トゥーランドット姫のもとにいれば自分たちの仕事なくなることはないことを歌う。群衆もそれに呼応して歌う。合唱が盛り上がり頂点に達したところで、一転して月が出てくるのを待つ静かな群衆の合唱となる。月が出てくると、首切りの処刑が行われることになるのであり、群衆は首切り執行人プー・ティン・パオに処刑の執行を促す。

そのような雰囲気の中、子供たちが中国の古謡「東天紅」(とうてんこう)の旋律に合わせて合唱しながら登場するが、この東洋的な旋律はプッチーニらしく異国情緒にあふれていて、とても印象的である。聴きどころの一つである。

やがてペルシアの皇子が処刑のために連行されると、群衆たちは一転して恩赦を乞い願う。この合唱にカラフのソロも加わって、助命嘆願の合唱がドラマチックに大きな盛り上がりを見せたとき、トゥーランドット姫が初めて姿を現す。彼女は処刑場に向かうペルシアの王子に冷ややかな一瞥を投げるだけで、一言も言葉を発することはないが、それだけに彼女の冷たい心がより効果的に観客に伝わってくる。このあたりが、トゥーランドット姫のキンキラキンの衣裳とともに、見どころであり、また聴きどころでもある。

皇子カラフはトゥーランドット姫の残虐な行為を呪ってやりたいと思っていたが、しかし、その彼女の姿を一目見て、すっかりその美しさの虜になってしまった。息子の様子に危険を感じた父ティムールは、ただちにここから立ち去るように警告し、奴隷リュウも同じように遠くへ行くよう誘うが、カラフは「ここに生きる道がある」と言っ、ここにとどまることを主張する。そのとき処刑場からペルシア皇子が処刑される直前に、その叫び声が聞こえてくる。父ティムールは「あのように死にたいのか」と尋ねるが、息子カラフは「栄光に満ちて勝利を得たい、彼女の美しさの中に！」と答えて、美しいトゥーランドット姫の謎解きに挑戦しようとして、銅鑼(どら)を鳴らそうとする。

そのときにこの宮殿の3人の大臣ピン、ポン、パンが現れて、カラフが銅鑼を鳴らすのを止めさせようとする。ここでコミカルな音楽が奏でられて、これまでとはまったく異なった、この歌劇のもう一つの魅力を感じ取ることができる。この場面も見どころ・聴きどころと言ってもよいであろう。コミカルな音楽にのって3人の大臣たちは、カラフにこの場から立ち去るようにと警告するが、カラフはそれに耳を傾けない。そこへこれまでトゥーランドット姫の愛を得ようとして謎解きに失敗して首切りの処刑にあった皇子たちの亡霊が現れ、各自が今でも「自分は彼女を愛している」と叫ぶが、それに対してカラフは「いや、私だけが彼女を愛しているのだ」と答える。このようにトゥーランドット姫に夢中になるカラフの愚かさを3人の大臣はあざ笑う。しかし、カラフはそれだけいっそうトゥーランドット姫に夢中になってしまう。

そのさまをそばで黙って見ていた奴隷リュウは、アリア「ご主人様、お聞きください」を歌い始めて、カラフの無謀な行為を止めさせようとする。この奴隷リュウのアリアも聴きどころの一つである。彼女の心優しさと彼女のカラフに対する心からの愛情に満ちあふれている。プッチーニらしい抒情的な魅力にあふれたアリアと言ってもよいであろう。

この奴隷リュウの涙ながらの訴えに応えるように、皇子カラフはアリア「泣くな、リュウよ」を歌うが、これも聴きどころであることは言うまでもない。このアリアに続いて、そのままフィナーレのアンサンブルとなる。謎解きに挑戦することを必死になって思い止まらせようとする父ティムール、自分のことをあわれに思っ、ほしいと嘆願する奴隷リュウ、謎解きへの無謀な挑戦をあざ笑う3人の大臣に加わって、カラフは自分の決意が変わらないことを歌い上げる。アンサンブルが一段と盛り上がり頂点に達したとき、カラフは「トゥーランドット！」と声高らかに叫びながら、謎解きに挑戦する合図として銅鑼を3度叩いてから、宮殿の中へと入って行く。ここで第一幕の幕が下りる。

第二幕

第二幕に入って第1場は、宮殿の楼閣でのコミカルな幕間(まくあい)喜劇といった感じで、コミカルな音楽に合わせて、3人の大臣ピン、ポン、パンによるおもしろく、またおかしな幕間劇が展開される。3人の大臣はトゥーランドット姫の謎解きに挑戦しようとする新たな求婚者の婚礼の準備と同時に葬儀の準備をする。彼らはこれまで首を切られた皇子たちの思い出に浸り、心の底ではトゥーランドット姫が幸せな結婚をして、この国全体も幸福になることを願っている。しかし、今またトゥーランドット姫と新しい求婚者との間で謎解きの儀式が行われようと

している。金管による行進風の音楽が鳴り響くとともに、大臣たちはその準備のために衣裳を整える。このあたりも聴きどころである。

第2場は宮殿前の広場であり、群衆と役人たちが続々と集まってくる。ファンファーレが鳴って大臣たちも登場してくる。そのあとに皇帝アルトゥムも姿を現すと、合唱は大きな盛り上がりを見せる。このあたりの合唱もオペラとして聴きどころであろう。

皇帝アルトゥムは謎解きに挑戦しようとする皇子カラフに向かって、もう血を見るのはたくさんなので、ここから立ち去るように促すが、カラフはあくまでも「この試練に挑戦したい」と主張する。

そうしているところへトゥーランドット姫が姿を現す。彼女がどのようなキンキラキンの衣裳を身に着けて登場するか、それも見物である。ゆっくり登場すると、彼女はなぜ自分がこのような残酷きわまりない謎解きで夫選びをするようになったのか、そのわけを語り始める。それによると、幾千年も前のこと、姫の先祖にあたるロウ・リン姫は異国の者に誘拐されて殺されたが、その怨念を晴らすためにトゥーランドット姫は異国の皇子に対してこのような謎解きの儀式をするようになったという。この歌劇の主人公が第二幕のこの場面になってようやく歌い始めるのであり、どのように歌い始めるのか、興味は尽きない重要な場面である。

トランペットによる音楽が鳴り響いて、いよいよ謎解きの儀式である。音楽もだんだんと盛り上がっていき、聴きどころであることは言うまでもない。トゥーランドット姫が「謎は3つ、死は1つ」と言うのに対して、カラフは「いや、謎は3つ、命は1つ」と答える場面も注目に値する。トゥーランドット姫はまず第1の謎かけをする。「暗い夜に玉虫色の幻影が羽を広げて黒い人間性の上に飛び上がる。全世界が懇願するもの。しかし、夜明けとともにその幻影は消えていき、心の中に甦る。毎夜、それは生まれ、毎朝、それは死ぬ」この謎かけに対してカラフは、「そう、甦るのだ！ それは希望だ」と答える。賢者たちが第1の巻物を開いて、「希望である」と解答を明かす。するとトゥーランドット姫は第2の謎かけをする。「炎のようにゆらめくけれども、炎ではない。あるときは狂気にもなる。また激しく熱を持っていて、情熱的でもある。またあるときは静かに物憂げでもある。もしそなたがそれを失えば死ぬことになり、冷たくなる。征服を夢見れば、燃え上がる。生きる輝きの黄昏には、そなたは不安の声を聞くことになる」皇帝アルトゥムや群衆、そして奴隷リュウに励まされて、カラフは「それはこの血管の中を流れる血潮だ」と答える。賢者たちは第2の巻物を開いて、「血潮だ」と解答を明かす。トゥーランドット姫は第3の謎かけをする。「お前に火を与える氷で、お前の火でもって、さらに冷たくなる。純白だけれども、暗い影がある。それがお前を自由にして、またお前を奴隷とすることもできる。お前が奴隷に甘んじるなら、お前を国王にもすることができる」トゥーランドット姫は「その氷は炎を与える、さあ、それは何か」と問いかけると、カラフは「それはトゥーランドットだ」と答える。トゥーランドット姫が驚いている中、賢者たちは第3の巻物を開いて、「トゥーランドット」と答える。この3つの謎解きの場面も歌劇『トゥーランドット』の中で文句なしに見どころ・聴きどころであろう。こうしてカラフが3つの謎解きを克服すると、群衆は歓呼の声を上げ、またそのあと中国の古謡「東天紅」を群衆が歌い上げて、場面はさらにいっそう盛り上がる。このあたりも迫力があって、魅力的である。

トゥーランドット姫の謎は解けて、群衆は皆大いに喜ぶが、しかし、トゥーランドット姫は父である皇帝アルトゥムに向かって「あなたの娘を異国の者に奴隷のように与えないでください」と懇願し始める。皇帝と群衆は「誓いは神聖なもの」と言い、またカラフも彼女に強く求愛するが、トゥーランドット姫は拒絶するので、カラフは逆に彼女に謎かけをすることにした。「あなたは私の名前を知らない。私の名前をあててください、夜明け前までに。名前をあてれば、私は夜明け前に死ぬことにしましょう」皇帝アルトゥムは明日の太陽が昇るとき、この若者が自分の息子となることを願うと、群衆は皇帝アルトゥムを褒め称える歌を歌い上げる。このフィナーレの皇帝讃歌の合唱も迫力があって、文句なしに聴きどころである。

第三幕

第三幕の第1場は夜の宮廷の庭である。神秘的な音楽が奏でられる中、役人がトゥーランドット姫からの命令を伝えている。「この北京の街では今宵は誰も寝てはならぬ。匿名の皇子の名前が分かるまでは」という命令である。

そこへ皇子カラフが現れて、その命令を繰り返すように、アリア「誰も寝てはならぬ」を歌う。そのアリアの中で彼は、「私の名前は誰にも知られないだろう。いや、いや、夜明けの光が輝いたときには、姫に明かすことにしよう

う。そして私の接吻がこの沈黙を溶かして、姫を私のものとするのだ」と自分の勝利を確信する。このアリアがなんと言っても歌劇『トゥーランドット』の中で最大の聴きどころである。ここで演奏される曲は、2006年のトリノオリンピックでフィギュアスケートの荒川静香がフリーの演技で華麗な「イナバウアー」を見せて金メダルを獲得したときのあの音楽である。この場面を鑑賞するとき、いつも私はあの荒川静香の完璧に近い華麗な「イナバウアー」の演技を思い浮かべる。アリアの最後の台詞は「勝つであろう！ 勝つであろう！」であり、台詞の内容とともに音楽もたいへん素晴らしいの一言に尽きる。この場面が最大のクライマックスであると言えよう。

このアリアを皇子カラフが歌い終えたところへ、3人の大臣ピン、ポン、パンが登場して、彼らはカラフに美女や宝石などを見せて、カラフを買収して名前を聞き出そうとするが、カラフは「世界がどうなってもトゥーランドット姫と結婚したい」ので、もちろんそれに応じない。そこへカラフの父ティムールと奴隷リュウが引き立てられてやって来る。3人の大臣ピン、ポン、パンはこの2人がその異国の皇子と話しているのを見ていたので、2人を痛めつけてその皇子の名前を聞き出そうとしたのである。やがてトゥーランドット姫もそこにやって来て、老人ティムールから皇子の名前を聞き出そうとしたとき、奴隷リュウが飛び出して、「名前を知っているのは私だけ」と叫ぶ。そこで役人が奴隷リュウを痛めつけて、皇子の名前を吐かそうとするが、奴隷リュウは決して白状しない。

このように拷問を受けても決して名前を明かさぬ奴隷リュウの強さはどこからくるのか。それを不思議に思っただけでなく、トゥーランドット姫は、「誰がそのような強さをそなたの心に植えつけたのか」と尋ねると、奴隷リュウは「愛です」と答える。「心に秘めていて、告白したこともない大きな愛だ」というのである。もちろん奴隷の彼女が皇子カラフに対して密かに寄せる「愛」である。「その愛の大きさはこのような拷問でさえ私には甘美なものなのです。なぜなら、それが私のご主人様への贈り物になるのですから。私が黙っておれば、私はあの方にあなたの愛を贈ることができるのです。・・・私を痛めつけて私に苦しみを与えてください。ああ、それこそが私の最高の愛の贈り物なのです」この歌劇『トゥーランドット』の中で最も重要な台詞と言ってよいであろう。このときの奴隷リュウのソロも、またそのあとすぐに歌われるアリア「氷に包まれているような冷たいあなたでも」も、聴きどころである。「氷に包まれているような冷たいあなたでも、熱い炎に溶かされて、あの人を愛するようになるでしょう」という台詞は、この歌劇のテーマでもある。この奴隷リュウこそ歌劇『トゥーランドット』の真の主人公と言ってもよいくらい、この場面における彼女の役割は大きい。この注目すべきアリアを歌い終えると、奴隷リュウは兵士の腰から剣を抜き取って、それを自らの胸に突き刺して、自害してしまうのである。

皇子カラフとその父ティムールは奴隷リュウの亡骸にすぎりついて嘆き悲しむ。群衆もまた彼女の「愛」に心打たれて、彼女の死を悼む。奴隷リュウの亡骸は埋葬のために運ばれて舞台から去って行く。プッチーニはまさにこの場面まで作曲したところで、病に倒れて、この作品は絶筆となってしまふのである。

しかし、そのあとは弟子フランコ・アルファーノがプッチーニのスケッチをもとにして補筆作曲して完成させたのである。

その補筆作曲部分では奴隷リュウが言ったとおりのことが展開される。皇子カラフはトゥーランドット姫に「死の姫よ、氷の姫よ」と語りかけ、「悲劇的な天界からこの地上に降りてください。真の姿を見せてください」と懇願する。これに対してトゥーランドット姫は「私は人間ではない。天界の娘です。・・・この魂は天界にあるのです」と答えるが、皇子カラフは「あなたの魂が高いところにあるとしても、あなたの身体は近くにある」と言って、拒み続ける彼女に強引に接吻する。するとトゥーランドット姫は、何か大きな変化があったかのように、最初は戸惑いを見せるが、だんだんと彼女の冷たい心は、涙ながらに、皇子カラフの熱い接吻によって溶かされていくのを感じる。そのとき夜も明けて、彼女は「夜明けよ、トゥーランドットの黄昏だわ」と叫ぶ。それに呼応するように皇子カラフも、「夜明けだ！ 愛は太陽とともに生まれる！」と叫ぶ。トゥーランドット姫が「私の栄光は終わった」と叫べば、皇子カラフは「違う！ それは今、始まるのだ！ あなたの栄光は再び始まるのだ！」と説き伏せる。この言葉にトゥーランドット姫はだんだんと冷たい心を溶かしていき、皇子カラフに身を委ねる決意をする。こうして二人が結ばれると、皇子カラフは「私の名前と私の命と一緒にあなたに贈ろう」と言って、ここで初めて自分の名前は「カラフ」で、「ティムールの息子」であることを打ち明けるのである。その瞬間、トゥーランドット姫は「あなたの名前を知りましたよ」と叫んでから、皇子カラフに民衆の前に自分とともに進み出ることを要求する。

そこで場面は第2場となって、宮殿の広場に面した場所であり、皇帝アルトゥムは玉座にすわっている。3人の大臣たちも連なって、トゥーランドット姫と皇子カラフは群衆の歓呼に応える。トゥーランドット姫が「この異国人の名前を知っています。彼の名前は愛です！」と叫べば、群衆は「愛」を称えて、「おお太陽よ！ 命よ！ 永遠で

あれ！世界の光は愛にあるのだ！明るい太陽のもとで笑い歌えば、我らの幸せは限りないのだ！」と合唱でもって歌い上げる。感動的な最終場面である。聴きどころであることは言うまでもない。

以上のように見てくると、歌劇『トゥーランドット』は主人公の冷酷な心が熱い「愛」によって溶かされていく物語であり、あらすじの上でもこれまでの『ラ・ボエーム』や『トスカ』そして『蝶々夫人』などと異なって、ドラマチックな物語構造を示しており、プッチーニのもう一つの進化した特徴を見せている作品であることが分かる。主人公は恐ろしいような冷たい心の持ち主で、一見、このオペラは恐れおののく残酷な内容のようにも思われるが、しかし、3人の大臣ピン、ポン、パンの登場によってコミカルな要素もあちこちにちりばめられている。プッチーニの幅広い音楽を示すものである。また冷酷な主人公の心も最後には熱い「愛」で溶かされるのであり、最後には「愛」が褒め称えられて、プッチーニらしい結末である。また褒め称えられているのは、2人の主人公たちの「愛」だけではない。奴隷リュウの「愛」もこの作品では見逃してはならない。否、むしろこの奴隷リュウの皇子カラフに対する「愛」こそ、この作品を動かすものであり、奴隷リュウの「愛」が2人の主人公たちの「愛」を成就させたとも言える。しかもこの奴隷リュウの存在はプッチーニの実生活の体験にも関係していたと言われている。さまざまな要素が織り込まれた作品であることが理解できよう。この作品はまさにプッチーニの晩年の作品でもあり、彼のこれまでの作品で展開されてきたもののすべてが盛り込まれた総決算の傑作とも言えよう。最終場面は弟子のフランコ・アルファーノの作曲によるものであるが、プッチーニの残したスケッチに基づいて、まさにプッチーニの旋律を見事に受け継いでいるところも素晴らしい。またトゥーランドットのキンキラキンの衣裳とともに華麗をきわめた舞台も見どころであることを付け加えておこう。このオペラの魅力は本当に限りない。まことに素晴らしい作品である。是非、この機会にプッチーニの晩年の傑作歌劇『トゥーランドット』をご鑑賞いただきたい。「愛」の素晴らしさに感動することであろう。

[メールマガジン「すだち」第95号本文へ戻る](#)

【すだち】徳島大学附属図書館報 第95号
〔発行〕国立大学法人 徳島大学附属図書館
Copyright (C) 国立大学法人 徳島大学附属図書館
本メールマガジンについて、一切の無断転載を禁止します
